

## ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.59  
まさか自分が

「えっ！まさか。」

脳裏を液体窒素の中に放り込まれたかのように思考が一瞬にして凍てついてしまった。

「古川さ～ん。よろしいですか？」健診の終盤、自分だけが担当ナースに呼び出された。

「こちらへどうぞ。」

順番からすれば前に何人もいるはずなのに、後ろにも。なんでいきなり俺？思わず自分を指さした。ナースはにこやかに頷いて診察室のドアを開け手招いている。恐る恐る診察室に入り、促されるままに椅子に座った。担当医が会釈をした後、徐に口を開いた。

「古川さん、」担当医が胸のレントゲンを指さしながら、「右の肺に異常陰影があります。」

時間というものは残酷だ。楽しいことをしている時にはあっという間に過ぎ去ってしまうのに。動物的

な勘というものだろうか？無意識のうちにも身の危険を察知していたのだろうか、先生の発する一語一語があまりに長く感じる。周りの人は談笑しながら帰り支度をしている。『本日の健診の流れ』という今日の工程表の中にも最後の呼び出しなどは記載されていない。何で自分だけが？「おかしい。」「そう言えばあのナースの笑みも何かぎこちない。」「おかしい。」「おかしい。」診察室までの一歩が千里の道のような。「おかしい。」気が付けば冷や汗で皮膚がジメツとしている。ここは逃げ出すべきか？全力疾走で走れば逃げ切れるかも。頭の中をいろんな事が駆け巡る。まだ間に合う。ナースに背を向けて走ってしまえばまだ逃げられる。

頭の中の思考とは裏腹に身体は催眠術にかかったかのようにナースの指示に従順に従っている。

まだ、間に合う。走れ、走れ、逃げろ。だが、残酷にも診察室のドアは閉められた。傍から見れば従順に椅子に座ったかのような。

「右の肺に異常陰影があります。癌の可能性が高いので近日中に呼吸器内科を受診してください。」

「えっ！まさか。」

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科  
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一